

地にまで持ってくる余裕は少なかった。こうして、植民地や軍事占領地を巻き込んだ阿片増産計画もうまくゆかなかった。

戦争がいまだかつてないほどの規模に拡大したことで、戦場の必需品であるモルヒネに対する需要も際限もなく増大した。軍需用モルヒネが極度に不足してくる。戦時下、なにごとにつけ、軍事が優先された。その結果、本来、民需用のモルヒネでさえ、軍需用に回された。また、前述したように磷酸コデインは政府が独占的に生産していた。弱い麻酔作用しか持たない磷酸コデインでさえ、戦争末期になると、全部が軍需用とされて、軍が持って行ってしまったほどである。このような状況だったので、戦争末期、民間の医療の場ではモルヒネや磷酸コデインの不足が深刻化した。なお、なくてはならない医薬品・モルヒネの原料ということで、戦後の1954年になって、ケシ栽培が再開される。戦後、復活したケシ栽培は1960年ごろが最も盛んであった。和歌山県が中心で、戦前の1割程度に回復する。しかし、その後、厚生省の方針が変更し、やすいインド産阿片の輸入に切り替える。お米と同じで、日本で作る阿片は国際価格よりも、ずっと高かったためである。

こうして、江戸時代中期以来の長い伝統を持つ日本国内のケシ栽培は、ほとんど消滅する。現在では北海道などで、約20戸の農家が細々とケシ栽培を続けているだけである。種子と栽培技術の保存のために、ごく少数のケシ耕作農家を存続させているのだという説明が当時の厚生省の係官からあった。一年の生産額は数十キロ程度にすぎないので、国内産の阿片はほとんど問題にならない。

私は、当時の厚生省から乙種研究栽培者の認可をとり、1985年以来、ずっとケシを大学の建物の屋上で栽培している【認可は毎年、新規にとることになっている。】。わずか2㎡だけである。毎年5月、ケシの花やケシ坊主を学生に見せている。今年(2006年)も見せることができた。文科系研究者では、ほとんど唯一人ではなからうか。

【10】まとめ

戦前、日本が展開した阿片政策をまとめる。

①内地および朝鮮でのケシ栽培。②中国人のいる植民地(台湾・関東州・満州国)での阿片専売制。③国内の製薬会社による文字通り世界一のレベルに達したモルヒネ類の生産。④国際条約に違反して、モルヒネ類の中国への密輸出。⑤領事裁判権を悪用し、中国でモルヒネ類の密売。――このように、日本は、その所有する植民地と内地、および中国とを有機的に結びつけ、⑥世界第一の一大麻薬帝国を築きあげた。⑦阿片政策の利益は莫大なものであって、それは資本の原始蓄積の一つになった。

「からゆきさん」と日本の阿片政策が、私の二十数年来の研究テーマである。これまでずっと近現代の日中関係の裏面史と、この二つを位置づけてきた。しかし、近年、いわば逆転の発想で、裏面史などではなく、これらこそ本体だったのではないかと考えるようになった。

福沢諭吉の有名な脱亜入欧論は、近代日本の進路をよく示している。明治以降、日本は中国・朝鮮と同盟して西欧列強に抵抗するのではなく、中国などを犠牲にして、自分だけいち早く欧米のレベルに達することをめざす。そのために、中国などをトランポリン代わりに踏みつけ、その反動で効率よく近代化しようとする。

日本の近代化の基礎に、中国などへの侵略があった。中国などを侵略しなければ、日本の近代化はなかった。しかし、侵略すべき対象の中国は、古代にあって文明のお手本であり、江戸時代まで、中国は尊敬されていた。中南米のインディオやアフリカの黒人とは明らかに違っていた。

そこで、中国人に対する蔑視観をあらためて国民に教えこむ必要が出てくる。こうして、福沢諭吉の脱亜入欧論は中国人に対する根拠のない蔑視観を伴った。劣等人種である中国人は、いくらいじめてもかまわないのだというものである。近代日本がその進路を定める時に、中国および中国人に対して、このような姿勢で臨んだことは、現在に至るまで大きな禍根を残している。これはキリスト教でいう『原罪』に当たるものだと、私は認識している。中国などを侵略することが、いわば日本の国是である以上、中国民族の弱点が真剣に研究された。その結果、阿片吸煙の習慣が注目されるに至る。阿片を吸う中国民族の弱点に喰らいつき、それこそ骨までしゃぶろうというのが、戦前の日本の阿片政策であった。また、阿片政策は他方で莫大な収益をもたらした。だから、阿片問題ぬきに、近現代の日中関係を論じても、ほとんど無意味である。阿片問題はそれぐらいの重要性を持っていた。私は、日本の阿片政策によって、1000万人単位の中国人が犠牲になったと推測する。恨みを残して死んでいった彼らのためにも、この問題を明らかにする必要がある。

【資料】

- ①二反長半蔵『戦争と日本阿片史——阿片王二反長音蔵の生涯』、すばる書房、1977。
- ②江口圭一『資料 日中戦争期阿片政策』、岩波書店、1985。
- ③江口圭一『日中阿片戦争』、岩波新書、1988。
- ④山田豪一『満州国の阿片専売』、汲古書院、2002。(927頁の大著)以下、4点は倉橋の著作。
- ⑤『日本の阿片戦略——隠された国家犯罪』、共栄書房、1996。(まだ、デッサンにすぎない。)2005。新装再版された。
- ⑥『二反長音蔵・アヘン関係資料』、不二出版、1999。(遺族の所にあった資料をまとめて公刊したもの。)
- ⑦『日本の阿片王——二反長音蔵とその時代』、共栄書房、2002。(二反長音蔵の評伝)
- ⑧『ベンゾイリン不正輸入事件関係資料』、不二出版、2003。(ベンゾイリンとは、塩酸ベンゾイルモルヒネのこと。約6トンのベンゾイリンを、ドイツから不正に大連港に輸入する。1930年、輸入した業者が逮捕され、裁判になる。しかし、関東庁の法律が不備ということで、全員、無罪になった事件。)